

古代出雲 竜蛇神のイワクラ

会員 近藤 崇

旧暦十月、神無月。

この一箇月の間、日本列島の諸国では、神々が各々の郷土を離れ、山陰道の

中央に張り出した出雲の国を訪れる。八百万の神々が話し合う神無月は、出雲の国では反対に、神有月と呼ばれる。

神有月の出雲は毎年のように風が強く、高い波に誘われて、南方種のセグロウミヘビが打ち上げられる事がある。

海蛇は出雲の国では神の使いとされ、「竜蛇様」と呼ばれる。

そして、出雲の神獣としての海蛇は、必然的に家紋や神紋に影響を与えた。

出雲の神社を幾つも訪れると、六角形の禪紋、つまり亀甲紋を多く見かける。

どうやら、この六角形は海蛇の背中の紋様を表現しているらしい。

旧暦、十月十日。

この日、出雲の西海岸、稲佐の浜



では、「竜蛇様」と神々を迎えるための神事、

「神迎祭」が執り行われる。

神事においては、とぐろを巻いた状態の海蛇のミイラを依り代として、諸国の神々を御迎えした後、神職らが出雲大社までの道のりを歩く。

「竜蛇様」は神々の先導役であり、神々の宿泊される場所は、大社本殿の東西の十九の社である。

さて、稲佐の浜といえば、国譲りの神話である。

「古事記」と「日本書紀」によれば、

大国主神の御子、八重事代主神は、出雲の国を譲った後に「天の逆手」を打ち、船を踏み傾けて海の中に入ってしまう。

この「天の逆手」が、どんな行為を示した言葉なのかは定かではない。

一説には、めでたい時に使う拍手とは逆の意味を持つ呪術だという。

そして、大国主神は御子の死後に自ら幽界に入った。

大神の死後、稲佐の浜に近い山並みの麓には、その御魂を鎮める神域と社が築かれた。

この時から、この世の政治はヤマトに引き渡され、反対に、あの世の政治は出雲が司るようになった。

これが、出雲の南に神々が集まるようになった理由である。

出雲大社には毎日のように大勢の観光客が訪れるが、本殿の背後の小さな山に目を向ける人は稀だ。

この小さな山は「八雲山」と呼ば

れる神域であり、出雲大社の宮司でさえも、ここに立ち入る事は許されていない。

この「八雲山」について、第八十二代出雲国造、千家尊統（せんげ・たかむね）氏の著書「出雲大社」（学生社、昭和四十三年）には、こんな話が載っている。

「この八雲山に、磐境があたかも三輪山のそれを思わせるようにあるということ、二三人の人から聞いたことがあるが、これをたしかめるすべ



はない。」

三輪山といえばヤマト一宮の神体山で、ここには出雲の神が祭られている。

三輪山の神については、「日本書紀」の崇神天皇の章において、その名前と姿が記されている。

その記述によれば、その神の名は大物主神で、その姿は蛇であったという。

一方、「古事記」の崇神天皇の章では、三輪山という山名の由来を語る場面で大物主神が現れる。

その場面では、山名の由来を“糸巻きに残った糸が三輪だけだった”として説明しているが、個人的には三輪という言葉が“とぐるを巻いた蛇”をイメージしているような印象も受ける。

それでは何故、三輪山の神は蛇の姿をしているのか。

この謎については、「古事記」の大物主神の章に手がかりがある。

その湯面では、国造りの相方（スクナヒコナ）を失った大物主神の所へ、別の神が海を照らしながら近寄ってくる。

そして、その神は大国主神に対し、「我をヤマトの青垣の東の山上につき奉れ」と仰せられたのだという。その神を祭った湯所が三輪山である。

神が海を照らしながら近寄ってくるという記述は、おそらく、神獣としての海蛇を空飛ぶ竜として表現したのだと思う。

ヤマトの三輪山と出雲の「八雲山」は、いずれも蛇の神を祭った山である。

出雲大社裏の「八雲山」に、どのような巨石遺構や列石が存在するにしても、それは海蛇の姿をイメージしているのではないか。

また、三輪山のイワクラは蛇の姿を形成してはいないが、そのイワクラ文化の源流を辿れば、きっと出雲の「八雲山」に行き着くのではないか。

出雲からヤマトにかけての地域には、カンナビという名の山が幾つも分布している。

三輪山も「八雲山」も、神の鎮まる山、カンナビである。

出雲とヤマトを結ぶ道は、カンナビの道である。